

ロマン派体験の思想史

——橋川文三『日本浪漫派批判序説』を手掛かりに——

平 野 敬 和

問題の設定

本論文は、橋川文三（一九二二—一九八三年）の『日本浪漫派批判序説』¹⁾を手掛かりに、ロマン派体験の思想史的意味を問うものである。日本ロマン派の文学運動は、プロレタリア文学運動の挫折とファシズムの拡大の中で転向文学が生まれ、一方では文芸復興という文学界の動きが顕著になったことを背景として、ロマン主義的方向を打ち出すことによって、時代的な閉塞感を打ち破ろうとする運動であった。雑誌『日本浪漫派』は一九三五年三月に創刊され、三八年八月には廃刊となったが、その後も保田與重郎の作品を中心に、多くの読者を獲得した。むしろ、『日本浪漫派』廃刊後の保田の存在こそ、日本ロマン派の影響力を物語るものである。戦前から戦中にかけて、日本ロマン派はまさに政治的な無力と時代に対する絶望感に対して、それからの逃避と救済を可能にするものであった。その運動については、戦後しばらくほとんど語られることはなかったが、そこにはマルクス主義と近代主義が相互補完的に戦後の批判的知の枠組みを規定するという思想状況において、その議論の射程から零れ落ちてしまう心情のあり様が存在していたように思われる。

橋川が『日本浪漫派批判序説』の諸論考を書いたのは、一九五七年から六〇年にかけて、戦後民主主義思想の論点がほぼ出尽くし、新たな批判に晒される最中のことである。橋川はの中で、戦前から戦中にかけて反近代と古典回帰を唱えた日本ロ

マン派、とりわけ保田與重郎の色濃い思想的影響を受けた自らの体験を批判的に考察することを試みたが、そこには日本ロマン派をウルトラ・ナショナリズムとして黙殺するだけで、その心情のあり様を内在的に批判し得ない戦後の論壇に対して、疑念を呈する意味が込められていた。すなわち、橋川が、一九三〇年代初頭に顕著な転向現象の収束した後に思想形成を行った世代がなぜ日本ロマン派に「いかれた」かを主題としながら、ロマン派体験の思想史的位置付けを試みたのは、日本ロマン派に「いかれた」精神構造は自分たちの世代に止まらず戦後も生き続け再生産されているのではないか、そしてその心情のあり様は戦後社会が問題化し得ない病理としてあるのではないか、という問題関心を提示するためであった。その作業を通して、橋川はロマン派のテクストを読む／批判すると同時に、ロマン派体験が破綻した戦後の思想状況に向き合うことを目指したのである。

戦後、日本ロマン派は全く抹殺され、黙殺されてきた。それには、しかるべき理由があったし、それについては、後にふれることにする。しかし、戦後のいわゆる「デモクラシイズム」の風潮にもかかわらず（それ故にか）、日本ロマン派の提示したはかないような問題意識は、それとしてどこか奥底の方でよどんでいるという感じを私はいだく。それは恐らく、いわゆる反動・復古主義の動向とはかかわりない形で、しかも、それに随伴する逆説的な否定的エネルギーとして、再び同じ精神史上の笑うべきドラマを現すかもしれない。かつてそれがあつたと同じ意味で、しかも自らが再び登場することの愚劣さを自ら

のイロニイとして。⁽²⁾

情況を見据える中で、何かわだかまってものを言うといった感のあるこの文章は、「精神上の笑うべきドラマ」を問わないで済ましている戦後社会への異議申し立てこそが、橋川の思想的課題であったことを示している。また、この文章には、日本ロマン派という橋川にとって自明なある原体験が、他の多くの人々にはよくわからないものとして存在することへの憤りも含まれていただろう。橋川は『日本浪漫派批判序説』の副題として「耽美的パトリオティズムの系譜」を掲げ、あえて日本ロマン派をその系譜の内に捉えることから、ナショナリズムのウルトラ化を自己の責任外の出来事とした戦後の思想状況を批判することを試みた。

本論文は、戦後思想の正当性が問われている現在という地点から、いま一度橋川の提示した問題に立ち返って、その批判の可能性を考えるものである。その際、本論文が重視するのは、橋川にとってロマン派体験が本当に切実な思想的課題として立ち現れたのは、その拠り所が立ち行かなくなる戦後であったという点である。すなわち、橋川においてロマン派体験が現実的な問題になったのは、ロマン主義に入れ込み、それを信じることによって救われていた戦中ではなく、ロマン主義によって担保される現実が破綻した戦後であったことに注目したい。その意味において、本論文の目的は、ロマン派のテキストそのものよりも、ロマン派体験を綴ったテキストを読むことの中に、ロマン主義への批判の可能性が開けることを示すことにある。

本論文では、橋川の思想的作業について、次のような問題を検討する。第一に、丸山真男・竹内好の議論も参照することから、当該期の言説空間における橋川の思想的立場付けを示すことにする。第二に、橋川の日本ロマン派批判の中心に位置したイロニイと政治の分析をめぐって、彼のナショナリズム論など、思想史研究との関係を明らかにする。第三に、ロマン派体験の思想史を問うという本論文の目的に関わって、橋川のテキストを通して読み取れるロマン主義批判の可能性を考察する。

一 『日本浪漫派批判序説』とその周辺

始めに、橋川文三の思想的立場付けを明確にするために、その周辺の思想潮流を示すことにする。

敗戦直後、戦後民主主義思想の担い手である戦後啓蒙派には、丸山真男に代表されるように、日本社会の「前近代性」を批判しつつ、個人の主体化を図る中から近代国家を立ち上げることはどのようにして可能か、という関心が顕著である。丸山は戦後の思想史研究の出発点ともなった『日本政治思想史研究』の「あとがき」の中で、戦中から戦後にかけての自らの仕事に共通する主題について、「封建社会における正統的な世界像がどのように内的に崩壊して行ったかという課題³」とした上で、「この課題の解明を通じて私は広くは日本社会の、狭くは日本思想の近代化の型、それが一方西欧に対し、他方アジア諸国に対しても特質、を究明しようと思った⁴」と述べている。こうした関心に基づき、丸山は徂徠学に近代的な思惟の成立、すなわち公／私の分裂、公的世界と私的世界の対抗的成立という「近代的なもの」の萌芽を読み取り、日本社会の「前近代性」を問題としつつも、それを克服する可能性を歴史上に辿る作業を進めたのである。

一般に、戦後啓蒙の担い手となる市民社会派の青年は、戦時期に講座派マルクス主義の洗礼を受けたと言われているが、丸山もその例外ではない。姜尚中が指摘するように、講座派理論は、「軍事的全体主義の早生のなグライヒシヤルトウンク（強制的な同化＝均一化）が進むなかで、社会全般の危機の構造をトータルに把握する体系的な視座を提供した」。⁵「丸山にとって日本の（近代）のアポリアは、内面的人格の領域に国家的なるものが土足で押し入るとともに、逆に私的な利害が国家的なるものに無制限に浸透して「倫理と権力との相互移入」が果てしない人間的な弱さと矮小さを作り出していく事態を指していた。そこでは「一身の独立」が「一国の独立」と相互規定的に統一されることなく、権力（クラートス）と倫理（エートス）とが渾然と一体になって、無責任の体制だけが蟠踞することになる」。⁶こうした「倫理と権力との相互移入」を防ぐために、丸山は個人が自由なる主体意識を

持つて政治に関わる国民主義論を立ち上げを試みたのである。

しかし、一九五〇年代には、丸山においても戦中から戦後にかけての国民主義論に修正が迫られた。丸山は「ファシズムの諸問題」（一九五二年）を始めとするファシズム批判の中で、国民主義論に見られる主体性への動員の思想、すなわち「仲介勢力」の介在を排除しながら、個人が自発的に国家へと結集していく近代の枠組みについて、ファシズムを招き寄せるものとして批判し始めた。彼は「上からのファシズム」論の中で、明治寡頭制がファシズム体制へと移行し得た理由について、「日本ファシズム」の「矮小性」を規定する「大正デモクラシー」の「矮小性」を指摘したが、その見解は、ファシズムの進行過程における「下から」の要素の強さは、その国の民主主義の強さに規定されるのであり、その意味において「日本ファシズム」が「上から」もたらされたことは「大正デモクラシー」の不徹底さを意味する、という歴史認識に裏打ちされたものであった。しかし、丸山には、「矮小」とされる「日本ファシズム」が、なぜ人々の動員を可能にする思想として機能したか、という問題関心は希薄であり、その意味において、ファシズム批判は外在的にならざるを得なかったのではないか。この点に関して、戦後民主主義の乗り越えが、さまざまな形で図られたのである。

橋川が『日本浪曼派批判序説』の中で、竹内好の文章を引き、彼の日本ロマン派批判の方向性に共鳴したのも、主として戦後の論壇を席巻した近代主義、あるいはマルクス主義の批判様式に対する違和感からであった。竹内は近代主義者、マルクス主義者に現れる、日本ロマン派への無関心という現象を批判したが、それは戦争責任問題の文脈において、戦後の知識人の立場性への問いが提起されたことに関わっている。彼はあえて、日本ロマン派という忌まわしき過去を持ち出すことによって、戦後思想のタブーを打ち破ろうとする。

マルクス主義者を含めての近代主義者たちは、血ぬられた民族主義をよけて通った。自分を被害者と規定し、ナショナリズムのウルトラ化を自己の責任外の出来事とした。「日本ロマン派」を黙殺することが正しいとされた。しかし、「日本ロマン派」を倒したのは、かれらではなくて外の力なのである。

外の力によって倒されたものを、自分が倒したように、自分の力を過信したことはなかっただろうか。それによって、悪夢は忘れられたかもしれないが、血は洗い清められなかったのではないか。⁽⁷⁾

橋川の議論の特徴は、竹内に見られるように、戦後の思想状況において意識化された問題を、あえて戦中の自らの立場を探索する作業として問うた点にあるだろう。それは、たとえば橋川の師でもある丸山における日本ロマン派への「無関心」とは、対照的である。丸山は「日本浪曼派批判序説」以前のことに題した文章の中で、「橋川君の最高傑作」と評しながらも、橋川からの批判を次のように片付けている。

橋川君は、丸山は「軍国支配者の精神形態」の中で、御神輿と官僚と無法者として書いているけれど、保田はどこにもあてはまらない、って書いてるんですよ。よくにいわせれば当たり前なんだな。あれは軍国支配者で、（中略）文学者は、保田じゃなくても誰でもあてはまらないのは当然なんです。⁽⁸⁾

そして、保田與重郎の「現実オンチ」を「バツカじゃなろうか」と一蹴するのである。敗戦直後の代表作「超国家主義の論理と心理」（一九四六年）に関心を重ねつつ書かれた「軍国支配者の精神形態」（一九四九年）について、戦時体験が十分に問われていないと異議申し立てをした橋川は、このように丸山と不幸にすれ違っていた。これは、橋川が、「私の日本ロマン派に対する関心は二重の構造をもつ。一つは、いうまでもなく、日本ロマン派という精神的異常現象の对象的考察への関心であり、もう一つは、その体験の究明を通して、自己の精神的な位置づけを求めたいという衝動である。この後者の関心は、いわば私の世代的関心ともいえるものである⁽¹⁰⁾」と言うように、世代間のずれの問題であったと同時に、戦中から戦後にかけての丸山のようなナショナリズム批判のあり方にこそ、戦時体験（橋川にとつてのロマン派体験）を戦後に潜り抜けさせる要因があることに注意を促すものであった。この点は、橋川が副題として「耽美的パトリオティズムの系譜」を掲

げ、ロマン派に共通する「非政治的思想」の政治的有效性(現実性)を重視したことに関わっている。

私はこの「序説」の副題として「耽美的パトリオティズムの系譜」という言葉を選らんでおいた。(中略)

ここで、「パトリオティズム」という言葉を選んだのは、「ナショナリズム」という政治的な用語を避ける意味もあった。いいかえれば、戦争中の日本における一種のウルトラ・ナショナリズムは、政治的なナショナリズムというより、むしろパトリオティズムとよんだ方が適当であろうという考えがあったからである。さらに、戦争下の国民的エネルギーを、あのように極度にまで動員したものが、いわゆるナショナリズムであつたとすれば、戦後におけるその急激な解消・分散の現象は、やや理解しにくくなるということも念頭にあつた。そして、戦前と戦後に一貫する国民の精神構造を追究しようとする場合、むしろ曖昧な根源性をおびるパトリオティズムの視角をとることが便宜であると考えたわけである。¹¹

この文章から明らかなように、橋川が「耽美的パトリオティズム」という言葉を選んだのは、日本ロマン派に見られる日本的なるものへの回帰、古典復興の動きが、「政治的と非政治的」の間を媒介し、まさに仮構された日本という共同体への同一化を可能にしてしまう心情のあり様を問題にするためであつた。その作業は、日本ロマン派が問うた近代批判の現実性に、改めて向き合う試みとしてあつた。¹²

二 イロニイと政治の分析

橋川がロマン派体験について、「私たちの感じとつた日本ロマン派は、まさに「私たちは死なねばならぬ!」という以外のものではなかった」と告白するのを見る時、それは時代的な閉塞感の中で、ある種の陶醉を与えるものであつたことを強く印象付けられるとともに、その精神史上の体験はやはり注意深く捉えられなければ

ならない。そのロマン派体験について、橋川の分析の中心に位置したのは、イロニイと政治の関係であつた。

橋川は『日本浪漫派批判序説』の中で、「私たちにとって、日本ロマン派とは保田与重郎以外のものではなかった」と述べているが、それは狭義の日本ロマン派批判としては語り尽くせない精神構造の分析に重きを置いたためであつた。橋川にとって保田を論じることは、「精神史上の事件としての満州事変」以後の革新的な存在としての意味を問うことであり、そのテキストに現れるイロニイの形態を析出する目的に基づいていた。

日本ロマン派は、現実の「革命運動」につねに随伴しながら、その挫折の内面的必然性を非政治的現象に媒介・移行させることによって、同じく過激なある種の反帝国主義に結晶したものと私は思う。その組織論が、「日本美論」であり、その戦略が「反文明開化官僚主義」であつたといえれば私のいう意味も明白であろう。¹³

このように述べて、マルクス主義の挫折から日本ロマン派への転回を引き起こした「日本ファシズムの奇怪さ」について、革命感情の「美」に向かつての後退・噴出、デスパレートな飛躍がもたらされたことに注目した。そして、橋川は、「問題の文脈をひろく我国中間層における総体としての「政治的と非政治的」の問題に拡大し、政治的リアリズムとそのアンチテーゼとしての日本の美意識の問題にまで結びつける必要がある」と説いたのである。¹⁴

ここには、保田が言う、「日本の新しい精神の混沌と未形の状態や、破壊と建設を同時に確保した自由な日本のイロニイ、さらに進んではイロニイとしての日本といったものへのリアリズムが、日本ロマン派の基盤となつた」(「我国に於ける浪漫主義の概観」一九四〇年)という近代批判の方法に対するこだわりを見て取れる。そのイロニイこそ、頹廃と緊張の中間に、無限に自己決定を留保する心的態度の表れであり、近代日本の精神構造の究極的形態を特徴付けるものと理解された。それは、同時に、イロニイと政治の分析に関わる形で、政治的な無力と時代に対す

る絶望感について、「郷土喪失」の感情は、感傷として、もしくは、主知的な決断として、いずれも「素直」に「日本への回帰」のコオスに吸収されていった¹⁷⁾と言われるように、「ネガティブな「故郷」の意識」を呼び起こし、政治意識が美意識に容易に回収されたことに注意を促すものであった。¹⁸⁾『日本浪漫派批判序説』の最後に、小林秀雄と保田において、「歴史」が「伝統」と同一視され、それらがいずれもまた「美」意識の等価と見られたことを指摘した上で、ナショナリズムがロマン主義という形をとって表れる場合の危うさについて、次のように述べている。

このような精神構造において、ある政治的現実の形成は、それが形成されおわった瞬間に、そのまま永遠の過去として、歴史として美化されることになる。(中略) 保田や小林が、「戦争イデオログ」としてもっとも成功することができたのは、戦争という政治的極限形態の苛酷さに対して、日本の伝統思想のうち、唯一つ、上述の意味での「美意識」のみがこれを耐え忍ぶことを可能ならしめたからである。いかなる現実もそれが「昨日」となり「思い出」となる時は美しい。¹⁹⁾

こうした精神構造について、橋川はその特質を日本の歴史上に辿り始める。彼が、「日本ロマン派におけるロマン主義の本質がどんなものであったか」という問いを提示しながら、イロニイについて、「私の気ままな考えではあるが、我国に幾度かくりかえされたロマンティズムの運動のなかで、日本ロマン派がもっとも過激な存在であったことはいうまでもないとして、それが明治の中期あるいは後期のロマン主義をある形でふまえながらも、なぜあのように異形の運動形態として現われたかという特質は、それがイロニイという一種微妙な近代思想のもっともラジカルな最初の体現者であったという点に求められる」と言う時、それは石川啄木以後繰り返された、近代日本における「強権」の発展過程とそれに対する反体制的底流の相互関係の中に正当に位置付けられるべきだと考えられているのである。

ここで、橋川のナショナリズム論との関連について、いくつか問題を提起してみよう。橋川は『日本浪漫派批判序説』を出発点として、以後、日本の国体、ナショ

ナリズムに関する論文を数多く発表した。そこに一貫した主題は、ロマン主義の近代批判の側面に注目した橋川らしく、日本思想の伝統の中にその源流を辿るというものであった。

日本の場合にも、ドイツの場合と同じように、あるきわめて優美で繊細な心の作用(たとえばもののあわれ)が、しばしばその反対の不気味で醜怪な政治行動と結びついており、しかもそれらがきり離せない関係にあったという印象は同様であろう。その一方のみを抽象して他方との絶縁をはかることは、論理的には可能かもしれないが、現実には不可能と考えるほかはないような、ある宿命的な共存関係がその両者の間に認められるという点もよく似ている。²²⁾

こうした問い掛けは、美と政治が渾然一体となつて存在した戦中の思想状況を鋭く見定めたものである。橋川は、「イロニイとしての日本」という思想について、「その思想の論理的・心理的内容の実質が、ロマンティシエ・イロニイと国学的主義主義のもっとも頹廢的な結合によつて規定されたもの」と分析したが、その思想構造の特質を追及する作業こそ、彼の思想史研究の根本に位置する主題であり続けた。

しかし、橋川 of 思想史研究は、このような問題関心が袋小路に入り込まざるを得ない条件を、初発より内包していたよう思われる。それは、ミイラ取りがミイラになる、と言うように、ロマン主義とは何かという問いが、再び日本の歴史上にロマン主義の伝統を作り上げてしまうというパラドックスである。この問題は、政治的動学の基盤をなす政治的価値(＝権力)の葛藤関係が、究極的には悠久な国体論の枠組みの中に吸収されるという構造を、日本政治の「無責任の体系」性と呼ばれる概念によつて理解することを試みた丸山に倣う橋川もまた、政治意識と美意識の関係について、その支配の特質に基づく独自の構造を、日本社会の歴史の中に読み込もうとしたことによるものであった。丸山のナショナリズム論を批判しつつも、丸山の思想史研究の方法論に影響を受けた橋川は、より強く近代日本の病理を抉り出すことへの執念を抱いていたのではないか。

このように考えるなら、むしろ橋川の問題関心として重要なのは、ロマン主義の思想構造について、その特質を歴史上に辿る作業ではなく、後の戦争体験論に繋がるような、徹底して戦中から戦後に持続する精神構造にこだわる態度である。橋川は『日本浪漫派批判序説』において、ロマン主義の系譜を歴史上に辿る作業から、ロマン派体験の思想的立場付けを試みることに議論を収束させたが、同時にそうした方向性では救い上げられない心情のあり様に気付いていたのではないか。ロマン主義がグロテスクな形をとって、戦争という現実を支えた精神構造にこだわる態度こそ、橋川の思想的作業の真骨頂である。

三 ロマン主義批判の可能性

橋川が日本ロマン派のイロニイの表出にこだわり、それと政治の関係を分析する態度は、ロマン主義の近代批判のあり方に内在して、その現在性を問うという立場に貫かれていた。こうした立場は、竹内好の提起した「日本近代史のアポリア」という概念とも、問題関心を重ねている。竹内は「近代の超克」と題した論文において、『文学界』グループ、京都学派、日本ロマン派が一堂に会した悪名高い座談会を取り上げ、その歴史認識の問題を炙り出す中から、そこで議論された「近代の超克」という主題を「日本近代史のアポリアの凝縮」として描き出した。この論文は、以前発表された「近代主義と民族の問題」の中で、日本ロマン派という「血ぬられた民族主義」を黙殺してはならないと主張し、「民族主義」の再認識を求めた立場性を、改めて提示したものである。竹内は「近代の超克」の中で、「日本ロマン派の役割」について、特に保田に言及する箇所で、「彼はあらゆる思想のカテゴリイを破壊し、価値を破壊することによって、一切の思想主体の責任を解除したのである。思想の大政翼賛会化のための地ならしをした」と述べる一方で、「近代の超克」といった論理形態に孕まれる行き詰まりを、次のように記している。

保田は「生れながらのデマゴーグ」であって同時に「精神の珠玉」であった。デマゴーグでなければ精神の珠玉たりえない。それが日本精神そのもののな

のである。保田は限定不可能なものであり、そこから逃れることのできぬ日本的普遍者の究極の一つの型である。「空白なる思想」が彼の思想であり、空白でなければ不死身であることはできなかった。(中略)

保田の果たした思想的役割は、あらゆるカテゴリイを従属させた京都学派よりもさらに前進していた。彼は文明開化の全否定を唱えたが、彼のいう文明開化は、一つの思潮でもなく、流行でもなく、論理でもなく、しかし思潮でもあり流行でもあり論理でもあるもの、つまり近代日本の全部であった。²⁵

竹内が大阪高校時代以来の知友でもある保田について語る言葉は、このように屈折したものである。橋川が日本ロマン派のイロニイの表出にこだわり、また竹内が保田の「空白なる思想」に「近代日本の全部」を見ようとする態度は、「近代の超克」論を始めとする日本近代の体験を批判する視座を獲得するために、その両義的な側面に内在して問題を発見する臭覚のありかを示しているのではないか。

このような問題を考慮に入れた上で、本論文が橋川のロマン派体験について、その批判のあり方で最も重要だと考えているのは、近代日本におけるロマン主義の運動に関して、その思想的意味が問われるのは戦後ではなかったかという点である。すなわち、ロマン主義批判の可能性は、ロマン主義のテクストを読む／批判する作業そのものではなく、ロマン主義が破綻する場面に向き合うことにあるのではないかと考えている。その意味において、竹内が「近代主義と民族の問題」の中で、ロマン主義批判の可能性を、それを批判した同時代のテクストではなく、戦後社会の中に読み込む姿勢は重要である。橋川はウルトラ・ナショナリズムではなく、あえてパトリオティズムという言葉を用いてロマン派体験の意味を考え、その現在性を捉えようと試みたが、彼のロマン派体験について重要なのは、彼にとってロマン派体験が本当に切実な思想的課題として立ち現れたのは、その抛り所が立ち行かなくなる戦後であったということだ。

橋川は「日本ロマン派と戦争」と題した文章の中で、「日本ロマン派は、いわば『もうすべてがダメだ』という発想の文学的先取として生れ、『頹廃とイロニイ』の自己主張として必然的な役割をになった。保田が「崖の下を見る必要はなく、そこ

から上を望む」という言葉であらわしているものは、いうまでもなく極端な主体喪失の意識であり、現実的にはロマンティクの状況追隨による参加の意味をもった²⁶⁵、そして、「保田はあの戦争を己れの思想の容れられなかったが故の敗北とみなし、己れの内部に絶対の挫折を見出しではない。彼にとつて、本来「すでに勝敗は問わぬ」というイロニーが大切であり、自己の主体の中にはいかなる責任も成立しないからである」と述べている。戦後の保田が、戦中の自らの立場を自己批判することなどなかったことを思い起こすなら、保田を始めとするロマン主義のテクストを読む／批判する作業そのものに、ロマン主義批判の可能性があるように思われる。これは、ロマン主義という形態に孕まれた心情のあり様の問題である。日本ロマン派に「いかれた」体験を持つ橋川は、その問題を確実に認識していた。

ロマンティクの精神表現が一義的な明確さを示すことがまれであり、しばしば知的な醜聞ともいふべき倒錯にいろどられてあらわれることも、確かである。何かそこに一種のいかげしい人間性の側面が露出し、人をして眉をひそめ、眼をおおわしめる頹廢の印象をともしうことも確かにそのとおりである。しかし、ロマンティクの魅力は、いわばそのような醜聞のうちに秘められた善美の呪いに結びつくとき、もつとも救いたい力として人間をとらえる。ある意味では、それは人間精神のもつとも普通で、しかもリアルな実相を象徴する明辞である。事実、多くのロマンティク批判者の精神の中に、批判されたまさにその心性が転移していることを見いだすのは、それほど珍しいことでもない。ロマンティクの超越的批判はほとんどそれ自体不可能と思われるほど、それは人間の心のとらえがたさと直接に結びついている。人はみずからロマンティクであるか、あるいは何ものでもないとする以外には、ロマンティクの批判者たることはできないかもしれない²⁶⁸。

このように述べて、橋川はロマン主義批判の可能性を、自らのロマン派体験に向き合う中から追及したのである。その立場は、日本ロマン派のテクストを外在的に批判する立場（橋川は、平野謙と高見順を例に挙げている）、あるいは現実の社会

状況から切り離して日本ロマン派を純然たる文学史的形態と見て、作品として評価する立場（橋川は、三島由紀夫を挙げている）とは異なり、日本ロマン派が読まれたという現実の中から、その文学運動の思想的意味を問うという態度を示すものであった。橋川の思想的作業の独自性は、日本ロマン派に属する一人一人の文学者が戦争にいかに対処し、いかなる作品を残したか、あるいは日本ロマン派そのものが何を、いかにしたか、というロマン派の思想的立場付けの問題とともに、日本ロマン派のテクストが書かれ、読まれた状況にいかに向き合うか、というロマン派体験の思想的意味を書くことを試みた点にある。その作業は困難を伴うものであったが、確かにロマン主義批判の可能性を開いて見せるものであった。

むすび

本論文は、橋川文三の『日本浪漫派批判序説』を手掛かりに、ロマン派体験の思想的意味を問うものであった。彼の思想的作業について、『日本浪漫派批判序説』が刊行されたのは、敗戦から一五年が経過した一九六〇年のことであり、その時間は決して短いものではなかったことも、見過ごすことのできない問題である。橋川に限らず、戦時体験は敗戦後すぐに語られるわけではない。橋川が戦後も戦時体験にこだわりの続けたように、その意味において、『戦後』とは各人の戦時体験により始まりが異なるように、戦中から戦後にかけての劇的な言説空間に転換にもかかわらず、戦時体験は「戦後」を拘束するのである。

現在さまざまな形で進められている戦後の正当性を問い直す作業は、そうした各人の「戦後」を描く作業に繋がるものである。冷戦体制の崩壊を契機として、とりわけ日本においては「戦後五〇年」をきっかけとして、それまで影響力を保持してきた批判的知の枠組みは、その有効性を問われることになった。戦後の再審を企図して提示された戦後の知識人をめぐる議論もまた、その流れに深く結び付いている。その際、戦後の再審という作業について問われるのは、戦後の思想状況に向き合う歴史家の立場性の問題であろう。歴史家が、自らもその一部を形成してきたはずの戦後思想の外部に立って、その不備を批判するという方法的立場をとるなら、

その立場は容易に外在的な批判に止まるであろう。

本論文は、現在の思想状況における批判のあり方を念頭に置いて、橋川がロマン派体験を問題とした立場性を再検討するものであった。その再検討の作業は、戦後思想に内在した思想史研究の方向をとることから、さらに進められるべきものである。日本の戦後史、戦後思想史の研究は端緒にいたばかりであり、その研究は今後、戦後の枠組みが急速に崩壊するにつれて、重要性を増すであろう。

注

- (1) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』(未来社、一九六〇年)は、一九五七年三月から一九五九年六月まで『同時代』に連載発表された諸論考と一九六〇年一月に書き下ろされた最終章からなる。
- (2) 橋川文三『日本ロマン派の諸問題——その精神史と精神構造をめぐって——』『文学』第二六巻第四号、一九五八年四月、四一—頁。
- (3) 丸山真男『日本政治思想史研究』あとがき『日本政治思想史研究』東京大学出版会、一九五二年(『丸山真男集』第五巻、岩波書店、一九九五年、二八七頁)。
- (4) 丸山真男『日本政治思想史研究』あとがき『二八七頁』。
- (5) 姜 尚中『丸山真男と大塚久雄——前衛的後衛として——』『神奈川大学評論』第二六号、一九九七年、四三頁。
- (6) 姜 尚中『丸山真男と大塚久雄——前衛的後衛として——』四四頁。
- (7) 竹内 好『近代主義と民族の問題』『文学』第一九巻第九号、一九五一年九月(『竹内好全集』第七巻、筑摩書房、一九八一年、三一頁)。
- (8) 丸山真男『日本浪漫派批判序説』以前のこと『橋川文三著作集』第七巻付録『月報』、筑摩書房、一九八六年(『丸山真男集』第二二巻、岩波書店、一九九六年、二六九頁)。
- (9) 丸山真男『日本浪漫派批判序説』以前のこと『二七五頁』。
- (10) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』未来社、一九六〇年(『橋川文三著作集』第一巻、筑摩書房、一九八五年、一〇頁)。
- (11) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』七六—七七頁。
- (12) 姜 尚中『橋川文三覚え書 ナショナリズムの「心」をめぐって』『現代思想』第二九巻第一六号、二〇〇一年十二月)は、橋川のナショナリズム論を丸山のそれと対置しつつ、前者の議論の歴史的な射程の広さを指摘している。すなわち、姜は、丸山が日本のナショナリズムの中に「幸福なナショナリズムの形態」を読み取り、それが「歪み」、侵略的国権主義や盲目的な超国家主義に変質していったと捉えたのに対して、橋川が

「近代ナショナリズムの原型」そのものの中に、そのような要因があったと考えていた点を重視する。「(こ)で橋川と丸山の関係で面白いのは、橋川が丸山の「超国家主義」にあえて異をとなえて、丸山が「良き日本」と「悪しき日本」の冷徹な二分法を方法として国家主義のイデオロギー構造の病理をえぐり出してはいるが、「日本の中にあるもつとも人間的に懐しいものと、もつとも嫌悪すべきものとの同時存在」そのものを問題にしている」と指摘していることである(二四五—二四六頁)。

- (13) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』三六頁。
- (14) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』一九頁。
- (15) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』二六—二七頁。
- (16) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』二七頁。
- (17) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』六〇頁。
- (18) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』七七頁。
- (19) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』八八頁。
- (20) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』一四頁。
- (21) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』四二頁。
- (22) 橋川文三『民族・政治・忠誠——ナショナリズムとロヤルティの問題——』『現代の眼』第一〇巻第一号、一九六九年一月(『橋川文三著作集』第二巻、一九八五年、四七頁)。
- (23) 橋川文三『日本浪漫派批判序説』四八頁。
- (24) 竹内 好『近代の超克』『近代日本思想史講座』第七巻、筑摩書房、一九五九年(『竹内好全集』第八巻、筑摩書房、一九八〇年、六二頁)。
- (25) 竹内 好『近代の超克』六〇—六一頁。
- (26) 橋川文三『日本ロマン派と戦争』『文学』第二九巻第八号、一九六一年八月(『橋川文三著作集』第一巻、一七三—一七四頁)。
- (27) 橋川文三『日本ロマン派と戦争』一八五頁。
- (28) 橋川文三『ロマン主義について』『世界文学体系』七七付録『月報』七三、筑摩書房、一九六三年(橋川文三『新装版』増補 日本浪漫派批判序説 未来社、一九九五年、二三五—二六六頁)。

本論文を書くにあたり、植野真澄さん(大阪大学大学院)から多くの助言を得た。特にお名前を記して、感謝申し上げます。

〔付記〕

本論文は、日本学術振興会の研究助成、及び文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

The Intellectual Experience of Reading the Japan Romantic School,
Starting with Hashikawa Bunzō's
An Introduction to the Japan Romantic School

HIRANO Yukikazu

Abstract : In this paper, I consider the historical meaning of the experience of reading the Japan Romantic School, starting with Hashikawa Bunzō's *An Introduction to the Japan Romantic School*. In this work, Hashikawa tried to consider the self-experience that received a dark influence from the Japan Romantic School, which extolled anti-modern thinking and the revival of Classical Japanese learning before and during World War II. He analyzed the doubts felt in the press in post-war days, which simply ignored the Japan Romantic School as ultra-nationalism. In this work, he criticized the texts of the Japan Romantic School and aimed to face the mental situation in which the Japan Romantic School failed.

This paper highly evaluates the point made by Hashikawa when he considered that after the war it was thought problematical to read the Japan Romantic School. He criticized the intellectual climate of post-war days, which regarded nationalism as “ultra” in order to evade responsibility and not include the Japan Romantic School in the “Genealogy of Esthetic Patriotism”. In this paper, the viability of the criticism of the romantic movement that Hashikawa presented is considered with reference to his discussion concerning nationalism and the discussion of Maruyama Masao and Takeuchi Yoshimi.